

2025 年 11 月 9 日 降誕前節第 7 主日礼拝メッセージ

「信頼は態度によって表される」

牛田匡牧師

聖書 ヤコブの手紙 2 章 14-26 節

11 月は「七五三」の季節ですので、晴れ着に身を包んだかわいらしい子どもたちの姿を見かけることがあります。私たちの教会でも 11 月を「愛児祝福月間」としていますし、また保育園でも「愛児祝福式」というお祝いの式をしています。その式の中では、子どもたちが、神様と周りの人たちから愛され、守られて大きくなったことを感謝し、またこれからも過ごせることをお祈りしています。そんな子どもたちが歌う讃美歌の中に、「神様を愛する」「人々を愛する」というような言葉が出てきますので、先日、保育園の子どもたちに「『愛する』ってどういうこと？」と尋ねてみました。すると、3 歳クラスのお友達がすぐに「分からない」と答えてくれましたが、その後に続けて 5 歳クラスのお友達が「大好きってこと」と教えてくれました。

私は、その素直な言葉を聞いて、その子は「あなたのことが大好きだよ、大事だよ」と言ってくれるおうちの人や、保育園の先生たちやお友だちに囲まれて過ごせているんだなあ、ということを感じました。人間は生まれた時から先天的に感情が豊かにあるわけではなく、様々な感情は周りの人たちとのやりとりを通して、後天的に身に着けていくものだと感じています。無表情なロボットから自動的にミルクを与えられるのと、人の手によって微笑みかけたり、言葉をかけたりしながらミルクを与えられるのとでは、赤ちゃんの心と体の成長に大きく差が出てくるだろう、ということは確かにありそうです。ですから、幼少期から、自分自身が周りの人たちから「愛され、大切にされること」を体験することを通して、やがて自分も他人を大切にしたいという気持ちや、実際に大切にできる能力を身に着けていくのだらうと思います。

さて、では、そのようなことを言っている私自身は、いつでも、また誰に対しても、ほほえみかけながら、相手のことを大切にできているかというと、残念ながら全くそうではありません。言行の不一致と言いますか、口では「大事にしている」と言ってるそばから、物を粗末に扱うように、他人に対しても口では「あなたのことを信

頼して、尊重している」と言いながら、顔はしかめっ面で、乱暴な言動であることも、自らを振り返ってみると、多々あるのではないかと思います。そのような態度は、本当に相手を大切にできていることなのでしょうか。もちろん、相手はそのように感じないでしょうし、相手に伝わっていなければ、コミュニケーションとしては失敗です。

そして、そのような言行不一致の問題というのは、私一人の問題なのではなく、人と人が社会を作って生きている中で、大昔から問題となって来ていたことでした。さらにそれは信仰を同じくする者たちが集まっていた教会においても同様でした。今回の「ヤコブの手紙」にも、そのようなことが繰り返し述べられています。

「ヤコブの手紙」は、「コリントの信徒への手紙」や「エフェソの信徒への手紙」のように、「〇〇の教会の人たちへ」という特定の人たちに宛てて書かれ送られた手紙ではなく、ヤコブという人が広く、様々な教会で回覧され、書き写されて読まれることを目的として書かれた公の手紙として、「公同書簡」と呼ばれています。そしてその主張は、今回の最後、2 章 26 節にも明らかなように「行いのない信仰（実践の伴わない信仰）は、（無意味であり）死んだものである」という明確なものです。14 節から読んでみても、とても具体的に書かれているので、あまり難しくはありません。

¹⁴「私には信仰がある」と言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか。（何の役にも立ちません）。¹⁵ もし、兄弟か姉妹が、着る物もなく、その日の食べ物にも事欠いているとき、¹⁶ あなたがたの誰かが、その人たちに、「安心して行きなさい。暖まりなさい。存分に食べなさい」と言いながら、体に必要なものを与えないなら、何の役に立つでしょうか。（何の役にも立ちません。だからこそ）¹⁷「信仰は、行いが伴わなければ、それだけでは死んだもの」だということです。

このような手紙が書かれた、ということは、裏を返せば、今から 2000 年近く昔の、紀元 1 世紀頃の教会においても、そのようなことが「よくあった」ということです。今回の箇所の前部分、2 章の 1 節から 13 節までには、イエス・キリストの価値観に反して、教会においても金銭的に裕福な人たちを優先し、貧しい人たちを後

回しにする現状が批判されていました。さらにまた「人を分け隔てしてはならない、差別してはならない」と言うだけではなく、「最も大事な掟は『隣人を自分自身のよう大切にすることであり、人の痛みを自分のこととして思いやること』だとも言われていました。それらのお話の続きとして、今回のお話が続いています。

「人の痛みを自分のこととして思いやること」が大切だと言っても、着る物がなく、お腹を空かせている人に対して、「安心して行きなさい。暖まりなさい。存分に食べなさい」と言うだけで、体に必要なものを与えないなら、何の役にも立たない(15-16)というのは、当たり前のことです。それこそ、当時の教会のひどい有様としては、例えば「コリントの信徒への手紙Ⅰ」のⅡ章には、教会での礼拝後の食事の席での様子が記されています。教会に集まる人たちが皆、それぞれのその日の仕事を終えた後、各自の家から少しずつ食べ物や飲み物を持ち寄りあって、一カ所に集まり、そして一緒に礼拝した後に、食事を共にする。しかし、残業で仕事が長引いて、教会に遅刻してやって来た人の分の食事は残されておらず、先に食べ始めた人たちは、すでに食べ終わっていて、すっかりお酒で酔っぱらっている……(17-34)。ここから分かるのは、そのようなことが、当時のコリントの教会の中にはあった、ということです。さて、現代ではどうでしょうか。似たような状況はないでしょうか。

「ヤコブの手紙」の著者であるヤコブは、2章の後半では「ヘブライ語聖書」の中から、神の言葉に信頼して、その通りに行動した二人の人物、アブラハムとラハブについて言及しています。二人とも、神の言葉を聞いた時に、選択肢としては行動することだけではなく、行動しないことも選択することが出来たにもかかわらず、信頼して行動したということが神によって認められ、そして後代の人々からも称えられるようになりました。おそらく、この手紙の読者なら「誰でも知っている昔話」ということで、この二人が例として言及されたのでしょう。

最後の26節の前半は、「霊のない体は死んだものである」と訳されていますが、この「霊(プネウマ)」はいわゆる「霊魂」のことではなくて、単純に「呼吸」のことです。「息をしないと肉体は死んでしまう。心肺停止の肉体は死んでいる」のと同じで、「行い(実践)を伴わない信仰」なんてものも、また死んだものなのだ、と言

うわけです。ですから、さらに言い換えれば「行い、実践というのは呼吸のようなものだ」とも言えるでしょうか。

22 節には「信仰が彼（アブラハム）の行いと共に働き、信仰が行いによって完成された」とあります。信仰や信頼というものは呼吸のように自然なもの。大げさに深呼吸ばかりをすることが大事なのではなく、たとえ小さくても着実に継続し続けることが大切。そんな呼吸のような小さな行動の連続によって信仰や信頼というものは完成されるのだ、とも言えるのではないのでしょうか。

福音書の中には「目は体の灯である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい、目が悪ければ、全身も暗い」（マタイ 6:22-23）というイエス様の言葉もあります。日本語で言う所の「目は口ほどにものを言う」にも通じますが、顔の表情が体全体の様子を代表しているということです。私たちは神と人に対する信頼を、大きな行動として表すことは難しくても、態度や表情のような小さなことからなら、始められるのではないかと思います。自分で意識していなくても、それこそ寝ている間であっても、私たちは絶え間なく呼吸をしているように、神の霊はいつも私たちの中にあり、私たちは神様の御手の中に生かされています（詩 139:5）。

「信頼は態度によって表される」ということを、他人のことだけではなく、自分自身のこととして、心にとめていきたいと思います。そして願わくは、私たちの言動の一つ一つが、一挙手一投足が、私たちの接する相手の方々お一人お一人に、安心と信頼を伝えられるものでありたい……。そしてそれは私たちの自分の力だけではできなくても、共にいてくださる神様によって励まされ、導かれて可能になるということ、そのような神様の働きに信頼して、今日も歩みを進めて参ります。